

学術大会報告

日本顎口腔機能学会第26回学術大会報告

長崎大学歯学部歯科補綴学第2講座

藤井 弘之

日本顎口腔機能学会第26回学術大会は、平成13年12月15日（土）に長崎大学歯学部臨床研究棟で開催させていただきました。年の瀬のお忙しいなか、本州最西端の地での開催にもかかわらず、全国各地から53名の会員の先生方のご参加をいただきました。

一般口演は5題のご応募をいただきました。

第1題（中西ら）および第2題（長谷川ら）は、いずれも嚥下運動に関する報告でした。第1題では、舌運動と下顎運動波形を舌骨下筋群筋電図と対比した、嚥下時の口腔周囲の動態に関する解析結果が報告されました。第2題では、嚥下時の喉頭運動、口腔周囲筋筋活動あるいはVideofluorographyでみた食塊位置に関して、頭位を変えるとどのように変化するかが示されました。このセッションでは、嚥下の口腔期、咽頭期の正常パターンからみた解析方法の妥当性、あるいは咀嚼から嚥下への移行時点に関する定義の統一の必要性などについて活発な討論がなされました。

第3題（岡安ら）では、マウスの自由咀嚼時の顎運動と咀嚼筋筋活動について、食品の違いによる差異を含めた報告があり、補食時と粉碎臼磨時での顎運動変化の機能的意義に関する質問とともに、今後の研究の進展への期待が寄せられました。

第4題（加藤ら）は、大臼歯部に生じたインレー破折症例を観察し、その大多数が機能咬頭間の主機能部位に生じていたことを報告しました。ディスカッションでは、力の要素に関する研究そして臨床疫学的なデータと実験的データとの統合が今後さらに必要であるとの意見が述べられました。

第5題（志賀ら）では、持続的なかみしめを行わせた時の咬筋筋電図の周波数分析結果を、BruxistあるいはTMD患者と正常者とで比較した報告があり、かみしめ持続に伴う筋電図波形の低周波帯域への移行の意味づけについて、あるいは正常者とBruxistやTMD患者の結果の違いについて活発な討論がありました。

当日座長をお願いし、円滑な運営と活発なディスカッションの誘導にご協力下さいました、佐々木啓一先生、冲本公繪先生、吉田教明先生には心より御礼申し上げます。

午後の特別講演は、「筋収縮の生化学 一化学現象と物理現象との接点を求めてー」と題して、長崎大学環境科学部の宮西隆幸先生に筋の収縮機構に関する最新の生化学的知見をわかりやすくご解説いただきました。また、ご講演の最後には、物理現象としての筋収縮を生化学的に解析するための研究手法を、解析対象別に例示していました。今回のテーマは、本学会ではこれまであまり取り上げられることのなかった分野ですが、顎口腔機能研究のさらなる発展に、有意義な示唆をお与えいただいたと考えております。

学術大会終了後には、長崎大学歯学部厚生棟にて懇親会を開催致しました。お帰りの時間が迫るなか、32名の会員の先生のご参加を得て、宮西先生を交えて楽しい一時を過ごすことができました。

最後になりましたが、本学術大会も皆様のご協力、ご支援をいただき、無事に終了することができました。会員の皆様には改めて厚く御礼申し上げます。